

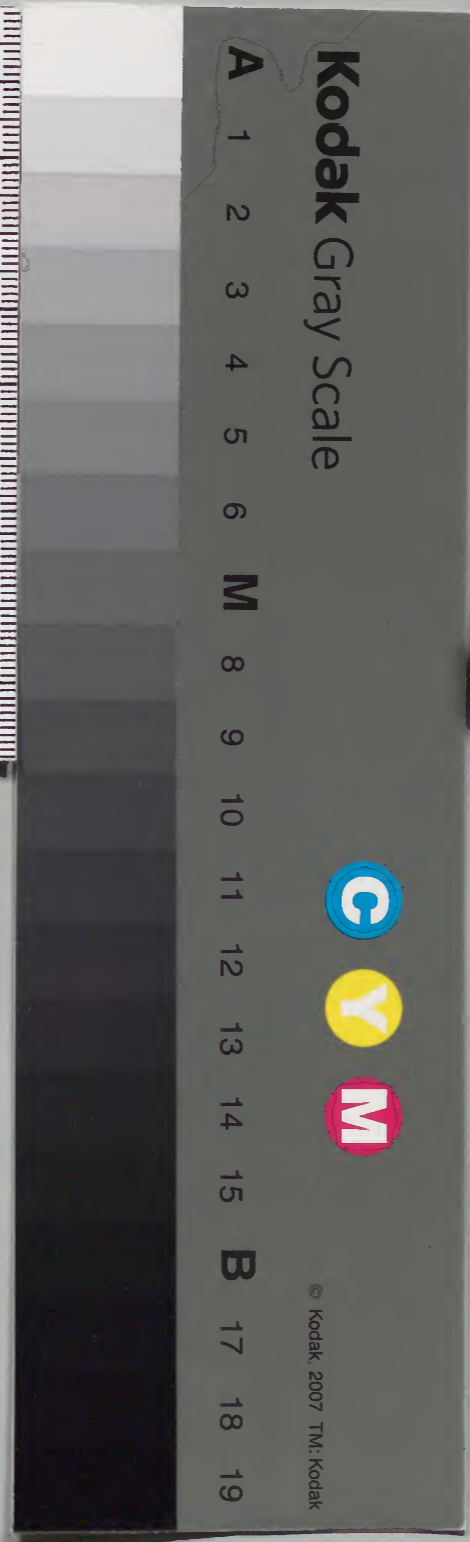
室川舎源筆

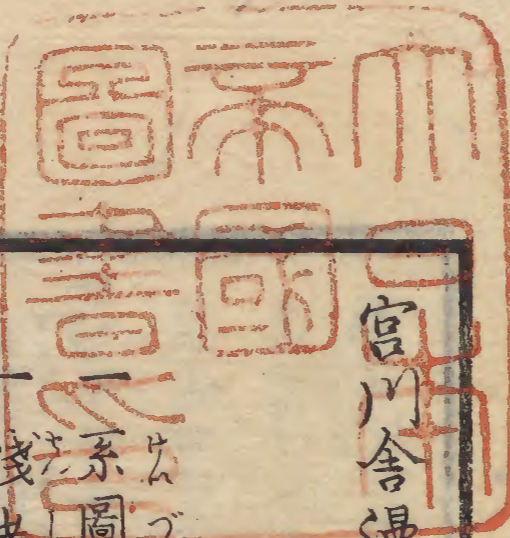
二

和書門			
二五	二四	一九	一七
號	冊	函	架
類	冊	函	架

庫文門内			
二五	二四	一九	一七
號	冊	函	架
類	冊	函	架

内閣文庫	
番號	和 25124
冊數	5 (2)
函號	213 117

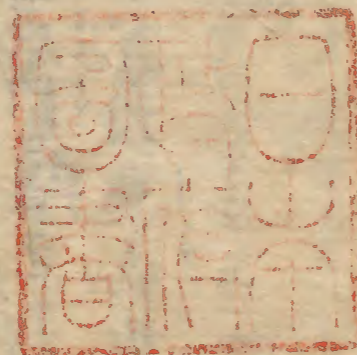




宮川舎漫筆卷之二

目次

- 一 系圖之奇驗けんづのきげん
- 一 殘者の歌ざん者のうた
- 一 八歳の娘子ら生はつさいのむすめらうま
- 一 千歳の値遇せんさいのぢぐひ
- 一 刀の徳たがひのとく
- 一 辻君の哥つじきみのかぶ
- 一 元政小傳并真蹟げんせいせうでん ほんまじき
- 一 富士行者傳ふじぎやうじやうでん



婦人の言は侍居る事是れ人老くのく屋敷の弱の事云ハ実よ
むう一語もはけしきりあましき鳴年子業の奇遇は
あれもなむいふあれ海

刀比徳

怪力乱神は語らばと見えども服おのりおまをり干時天保八酉
年二月下旬の事なり一干次女の乳母ありは日暮方俄に
夜着りいかにあはれなり如翌朝やりの扱も不思議
なり此乳母を枕を風呂敷包ぎ背負ひて男来りて男
我此乳母をいかにあはれなり是れ今立合々也其
一帯の事も連言行んと爲りて中史に全く記すに

見ゆ見ゆの事ありと見えども今も私例に居りいかにあれ
事なり疫神よりいかにれりいかに持て言はれ且又干
方お菅神の真筆持伝え者なり右の法を枕を掛りて
外恐怖し志しきく言乳母が最も早く後夜被男只今
立去りていかに全快なりいかに不思議なり其日ハ上野山内の縮
荷の祭礼ありていかにいかにいかにいかにいかにいかに
志しき左の歯痛なりいかにいかにいかにいかにいかに
今も痛み一歯抜くなりいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
又いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに

松本

札

日記 日十三日

和歌懐紙が書子紙を振えんとす。また折系一僧。あま
けり。また僧是。一。路。く。は。お。り。い。ん。と。い。ふ。予。が。白。足。は。修。行
な。る。ん。か。り。ゆ。け。な。ぬ。中。の。か。ま。れ。は。修。く。ふ。あ。れ。の。ま。は。り。は
心。も。正。し。く。ま。あ。り。ふ。か。は。し。り。と。ま。ふ。事。は。し。れ。ぬ。は。り。は
何。も。も。い。は。り。し。り。の。ぬ。り。は。也。戸。の。開。き。も。は。り。ぬ。は。り。し
ん。と。は。し。り。は。し。り。ぬ。く。も。い。は。ぬ。か。し。ん。ま。る。見。望。の。能。く。ん
あ。ま。り。の。心。に。は。通。ん。と。あ。ま。り。の。え。げ。の。あ。り。は。ま。り。も。世
し。り。の。み。の。識。の。業。も。あ。ま。り。の。み。の。み。の。佛。道。の。因。あり。日。夜
よ。あ。り。の。善。事。と。い。ふ。も。さ。れ。り。無。業。と。い。ふ。も。さ。れ。り
予。も。功。徳。善。業。と。い。ふ。も。さ。れ。り。は。り。の。事。に。お。よ。す。

何度にも修行のあまのぬりあり物など一りしかるはるる
根本よりけりぬ故あり

十六日 訓点戒牒及光照寺化疏各一卷

十七日 午後讀源氏須戸卷十三張半紙一僧曰戒律は坊の
養生にもあはゆふとぞんを予曰あんと戒のふあらん
ハ等の法蔵皆良業なり身心のあふ福はまはるる
外のものを詩歌のそびやくまはれ即定惠三法と修
みしはるる二法具する事は坊の一致あり已の庵なり
けり人の平用と教し人のまはるる坊の経路あり

西行上人明惠上人の語りて我故を後にもかゝる母
呆れたる花子規月をまはるる物との興よ白ひて元所
有留虚妄あるも胎まきまき耳の満り又よみあは
ぬのまはるる真言より花を先取の實と思ふも
月影後にも空月にも思ふは作の如く空隨縁は
くまに空をくわ紅多れけり虚度よりわすれぬ
名をばあけは空を鳴るあまの似たり然もも空堂
より鳴るあまの多れは空を又鳴るわすれぬあま
我も亦は虚言のぞく也心のよすれは空を極くの空を
よすれはつえども更なる源あり此の亦是如来の形体也
空を一は空を二は空の依縁を空を思ふは空あり

一も空をいふは秘密の真言と唱ふは空の空あり
よす法は得るなりけり空の空あり空の空あり空
人此道を學ぶは空路に入海して空あり
山海くさありあり空の空あり空の空あり
是も空あり空の空あり空の空あり空の空あり
十八日天大晴
嘗彌即出高槻肩輿中念誦年々看須一帖
書坊日水来り出廬山戒壇院戒牒一卷世尊寺行忠筆
予見るより一遍又示為家卿書古今之作者傳一帖古今
集歌人之履歷尤詳也予乃覽了還

十九日ナク

廿日

讀刑定止觀及源氏物語

廿一日

午後省養壽院見源氏物語十五六張下畧

又元政上人の詩歌共集りてを爰小贅すべし然もども多し

源氏の里に任あれし後

書海亭やハ案も旁もどりし社

名れあめ多し源仲のきき

山家稿

朽ぬけおろししそよ人

心りうきおの紫を

宇法川のあふきのけりす人を通る

静る久しと肥す紫木の往く

名表葉大好の誰と思ひかゝりて

おもひうげよ厚す

世の中ハ誰も思ふはまのく

浮く多しよちの紫ゆ

けりく平家

そかふくすりやも若かりけり

三室のあはれ入る

元政ゲンセイが筆フデ予が家ウチ付ツケふはあは

此章ハ時人トキノヒト傳ツトふええなり

志シはらら此こゝ茶チャ一イチ州シュウををくくららむむけけははとと
 人ヒトがが漢カンりりをを受ウケててすす
 むむすす路ロををききるるははもも始ハジりりすす
 果ミたたるる法ホウのの道ミチをを基キにに
 大オホいいははせせよよ福フクをを得トクるる位イにに
 折マりりのの故コをを冬フユのの光ヒカリ
 如ニくくすすけけしし雪ユキのの深フカいいのの法ホウをを
 ちちぢぢりり記キ録ロクすすにに終ハジまりりすす

翠王

茅山仙門
元海集

富士精竹書軒

富士講行者傳

▲富士行者ハ書行藤佛音佛音以以初祖初祖ト以以後後ハ加茂肥後守
第五庶子天文十年辛丑正月十五日生幼名ハ長谷川竹松七
ノ一富士信心發起一永禄元年初初富士行者ト有リ
元龜三年四月八日吉田音口音ヨリ登山登山以以初初長谷川左近将左近将加茂
甚平音ト名名有有又又角行小玉音大旺音又書行藤佛音佛音
書行東覺佛音ト号号以以元和六年春人穴在富士郡入入寺寺六角音の杖杖
ト立立
角音有有木木ト立立行行をを角行ト以以之之掬掬小書行小書行
カク行カク行ト以以之之海海をを角有有木木の上上ト行行ト以以之之角行角行

浅間音ヨリ怪音トシシ文字音ヲ傳傳リ書始音ト名名訓音同同
ト立立書行ト更更メ有有ト以以之之杖杖ト以以之之行行杖杖ト以以之之
一丈二尺の杖ト術音不音食音不音飲音不音眠音ト有有子音日音叅音以音龍音今音世音傳音の
富士行音の偽音字音ト浅間明神音の教音有音ト以音之音正保三年丙戌六月
三日人穴音ト入音寂行年百歳
二世日行日珥音珥音下珥音字音都音人俗名軍平初音僕音
珥音珥音ト以音之音美應元年壬辰十月十三日死
三世旺音心音珥音江戶人俗名赤葉庄左門寛文十一年辛亥正月十
三日死
一四世月珥音珥音江戸石町人寛文七年生俗名品珥音理兵衛元禄

二年己巳正月廿三日死門人二人なり

一 藤原月心 是光清派の祖

一 八月行朝 仲 是身録派の祖

一 辰辰月俗名村上七九門寶永五年戊子十二月廿九日生

一 於江戸小傳馬町二丁目其子村上一派の祖

一 再建あり寶曆九年四月死行年七十八

一 五世月行 朔仲 伊勢人俗名森太郎吉享保二年丁酉九月

一 廿六日於江戸白銀町死

一 六世食行 身録 伊勢一志郡川上村の人也俗名伊辰伊多信

一 寛文十一年正月十七日生 業ナニ

一 江戸小傳馬町 高買

油賣多 持付 身録の
年回の時信者 無

十七日 月行と師 富士村 若

一 相夕二度の水垢離 板橋宿平緒

一 所 緒今 多 新 口 浜 右 馬 地 面 内 住 傾 城 窪 小 泉

又六ヶ 地 内 福 信

政運云野口氏 板橋 江戸 幕 野 仲 町 住 身 録

一 子 孫 多 知 己 者 然 記 小 泉 氏 亦

一 平尾町 身 録 初 地 住 人 衆

一 吉田の師 職 田 邊 伊 賀 及 田 色 和 泉 家

一 登 心 志 吉 田 師 職 田 邊 伊 賀 及 田 色 和 泉 家

諸君と夜涼く人静。時も候は思ふに言はずも折令
一々四隣より書く是とて同者なり。夫は麻字地は福了者
んとす。斯る事あり。店主人も許す。多の事あり。撫さす。とて
身録に他は福さんといふ。身録理の座に置き。他は投者といふ
之れいづれも。それと懸す。許し老あり。田舎十か右。つとて
吾儕。浅間の往。澤を。あひ。活本を。あひ。成。職。と。し。抄。旨。と。言。信
き。若。租。人。と。い。ふ。も。疎。ま。を。海。く。は。と。身。録。に。許。し。を。投。者。に。す
其。後。あ。り。は。家。に。投。宿。し。享。保。十。八。年。山。上。に。入。寂。と。傳。り。絶。頂
釋。迦。ヶ。山。獄。に。生。地。と。定。む。け。り。と。後。の。大。文。司。ふ。旨。と。い。ふ
八合目より六段の 五合目鳥帽子岩に生地と一六月十三日の食と
おふあにあり 斯十郎右衛門傍に去るに命終のやうあると云ふに二十一日九は後如の

道歌七十二巻一三十一日の巻といふ今折者とも祈念の時
は放揚と稱し言唱し其者是あり。遂に七月十三日辰刻命終
了如享年六十三登山四十五度あり
遺骨年久しく存ざり。吾彼が孤の陰をを始むり
し。言。歩。碎。多。し。に。り。身。録。が。法。身。回。り。十。年。右。衛。門。捨。れ
収め。別。地。に。埋。む。其。地。一。子。お。傳。り。し。を。心。の。り。者。も。知
り。事。あり。と。い。ふ
十郎右衛門北行鏡月物語といふ寶曆十年正月廿六日死享年
八十一此孤はたて有谷の折者也。身録が隨身の
物件傳へ。言。十。か。右。衛。門。が。家。に。り。り。昔。も。は。い。づ。れ。の。れ。に。投。宿。し。り
り。は。も。必。付。と。お。き。お。あ。り

今吉田の師職八十余家にりりは家より比する物あり身縁が
余沢あり

子代尼小傳并真蹟

子代尼

子代女が加賀に松任駅今沢の落の福増屋六衛門
しり小者の娘あり幼より風範の志あり
少時徳信のむすめなり又母は言さハカシの
志ありをとりし柿の徳人支考徳信の屋敷
といえぬ若き家より母を母とて母とて母とて
のり金沢の福岡某が家より嫁に其後夫身は
ありりり招任は母の父の家よりなす

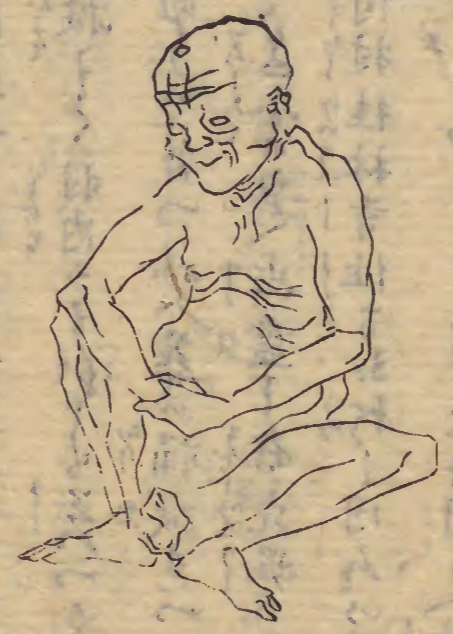
子代尼

徳信のむすめなり母は言さハカシの
志ありをとりし柿の徳人支考徳信の屋敷
といえぬ若き家より母を母とて母とて母とて
のり金沢の福岡某が家より嫁に其後夫身は
ありりり招任は母の父の家よりなす

辞世

月も見えぬ家ハ此世なり
金澤専光寺一向は華又松任駅聖興寺

お本死骸打まのりしとて重子三度位の小児は
 ありふり多し是等ゆゑに白赤も赤くはる屍骸も
 ありふり多し中熱身臭くあぶら出た末の腐り白く
 肉は赤くはる尖りいれあつて一方向付不すいし
 形肉色の松子果てぬ見えかゝるの中すい以上



又是と同日の譚り知化四丁末年三月廿四日夜信濃水大比呂
 山多押出りし折田玉水内那川中嶋氷鈍村松平伊賀候の分
 家よりすは松平某の領分百姓の屋敷内ら干塊り
 死骸屍骨りし此諸動りすに依りし是は此日村小一向宗
 唯一念寺の僧是と名くはりし是死骸むり越後
 国小宏智法印といふおりの入定りす後世に骸不朽干塊り
 骨えいし今此死骸とす小堂とりて至る組合せ上りそす
 可げりしと思ふは親念往生の形骸なり依り唯念是と貫
 受厨子等とらるるに在る一人は伊賀守信のり此
 形多しとてお本は骨領をより奉詣りし埋葬ゆゑ
 海き中へ投いす今埋葬りし其形も本係し彫刻りし

